

他者志向的達成動機の規定因としての 親の養育態度と期待

学習院大学 文学部

伊藤忠弘

Parental attitudes toward child rearing and expectations for child as determinants of other-oriented achievement motivation

Gakushuin University, Faculty of Letters

Ito Tadahiro

abstract

“Other-oriented achievement motivation (OAM)” is to achieve for meeting family members’, peers’, and other people’s expectations. OAM is in contrast to “self-oriented achievement motivation (SAM)” that is to achieve for oneself. The purpose of this study is to examine the relation between parents’ attitudes of child-rearing and expectations for their children and their childrens acquiring OAM. 185 undergraduates participated in this study. Their parents’ attitudes of child-rearing were measured by PBI (the parental bonding instrument) and divided in four types (“autonomy”, “care”, “indifference”, and “over-protection”). Their types of motivation were measured by the self- and other-oriented motivation scale (Ito, 2004) which had five sub-scales (integration of OAM and SAM, SAM priority, SAM as an ultimate motive, perceived negative aspect of OAM, and OAM priority). The results showed that “care” group had the highest score and “over-protection” group had the lowest score in “integration of OAM and SAM”. This effect was found only in mothers’ attitudes of child-rearing. In addition, parents’ high expectations had positive effect on both acquiring OAM and perceiving negative aspect of OAM (such as pressure). But parents’ expectations for their children to be accepted by other people had negative effect on perceiving negative aspect of OAM. It seems that parents’ attitudes of child-rearing and expectation for their children are important for their children's internalizing other-oriented achievement motivation.

Key word: achievement motivation, other-oriented motive, expectancy from parents, parental attitudes toward child rearing

目 的

他者志向的動機は、「自分を支え応援してくれる家族や仲間のため」、「応援してくれる周りの人

の期待に応えるため」という意識で自らの達成行動に従事する動機づけである。「自分のため」という意識で達成行動に従事する自己志向的動機と対比される。真島（1995）によれば、自己決定的

本研究を実施するにあたり、科学研究費補助金の助成を受けた（基盤研究（C）課題番号19530600、研究代表者：伊藤忠弘）

でありながら、同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続ける意欲の姿であると定義される。他者志向的動機によって動機づけられる時、その期待の源泉となる他者としては、まず親の存在が指摘されるだろう。

親との関係性が他者志向的動機を媒介して達成動機づけに及ぼす影響過程を明らかにしようとする際に2つの点を考慮しなければならない(伊藤, 2009a)。

第一に、自己決定理論が仮定しているように、重要な他者の存在や関係性によって外発的な動機づけが内面化されて自律的な内発的動機づけへと変化するならば、親との良好な関係や親からのサポートは他者志向的動機だけでなく自己志向的動機を促進することが予想される。

伊藤(2004)は、大学生に高校の勉強について回想させて、学習動機の尺度に回答させるとともに、親が期待していたと思う内容を自由記述させ、両者の関係を調べた。その結果、「良い成績・良い大学」への進学を期待されていたと認知している群は、「勉強しないと親に申し訳ない」、「親の期待に応えたい」といった学習動機の「親関係動機」の得点が高く、人並みであることを期待されていた群や期待されていなかったと感じている群は「親関係動機」の得点が低かった。また期待されていなかったと感じている群は、「教師関係動機」や「友人関係動機」の得点も最も低かった。この結果は、他者志向的動機の獲得には親、教師、友人からの期待経験が必要であることをうかがわせる。

しかし一方で、勉強については自分に任されていて、好きなことを自主的に努力するように期待されていたと報告した群が、勉強することは当然であり子どもとしての義務であると考え「義務・無条件受容」の得点が最も高かった。特に「良い成績・良い大学」を期待されていた群よりも高かったことは注目される。これは子どもの自主性に委ねるという親の態度により、勉強してほしいといった潜在的な親の希望や社会の要請が積極的に内面化され受容された結果と解釈できる。このように親からの働きかけは学習への動機づけを促進しうが、高い期待を伝えるか自律性を求める

かによって、その質が異なっていることが予想される。

第二に、他者から期待される経験が必ずしも他者志向的動機を獲得させるとは限らない。他者からの期待が自分の能力を超えるほど高いと認知されると、その期待に応えるべく努力する一方で、期待に応えることができないかもしれないという不安やプレッシャーにさいなまれるだろう。実際に期待に応えられなければ罪悪感を感じたり、達成課題自体から遠ざかることも予想される。また他者からの期待が自分の本来やりたいことと一致しないことにより葛藤が生じる可能性もある。そのような場合には両者を調整する必要に迫られるが、そのときに他者の期待に応えることよりも自分のやりたいことを優先することで、自己志向的な達成動機づけを重視する機会となるかもしれない。

伊藤(2004)は親の期待に対する大学生のとらえ方を自由記述により調べている。良い成績や良い大学への進学を期待されていた群では、「期待に応えたいと思った」、「頑張ろうと思った」など、親の期待を肯定し自分の勉強を動機づけている者が40%にとどまり、「プレッシャーを感じた」、「期待されすぎて困った」、「すごく嫌だった」など否定的にとらえている者が27%、親の期待に反発して「自分のしたいように」、「自分のために」と考えた者が25%、肯定と否定の入り交じった態度を持つ者が8%と、かなり多くが他者の高い期待と自分の能力や希望の間に挟まれてその対処に追われていることがうかがわれた。好きなことを自主的に努力するように期待されていたと報告した群は、「親の期待に応えたい」、「とてもうれしい」、「やりやすかった」など肯定的に捉えていた。また親の期待をまったくあるいはそれほど感じていない群は、「納得した」、「ちょうど良かった」など肯定的な態度の他に、「少しさびしかった」、「不安だった」といったむしろ逆に親の関与を求めるような記述や「心の中じゃ期待しているんだろうなと思っていた」といった親の語られない背後の期待を推測するような記述が認められた。

伊藤(2009a;2009b)では大学生84名に対して半構造化面接を実施し、親の期待について、その

内容、勉強や進学についての関与の仕方、将来の進路の希望と、それに対する自分の感じ方などについて質問した。さらに周りから期待された経験、期待されてプレッシャーを感じた経験、他者からの期待と自分の希望の葛藤経験についても質問し、最後にこれまでの努力の理由が「自分のため」か「周りの人のためか」か「両方か」という質問をした。

良い成績や偏差値の高い学校への進学といった学業や進学をめぐる親からの期待を認知していた者は全体の42%であり、それをプレッシャーとして感じていた者は全体の13%であった。そのほとんどは葛藤経験も指摘しており、黙従や反発、無視といった否定的な反応で対応していたことが指摘した。一方、全体の29%はプレッシャーについて言及せず、このうち親の期待を肯定的に捉えていたのは半数で、残りの半数は妥協、表面的な受容、無視、反発など否定的に反応していた。

さらに親の期待について「期待されていない」や「わからない」と回答し、勉強や進学についても言われたことがないと回答した者は15%であり、その半数以上は親の態度を少なくとも表面上は肯定的に受容していたが、もっと関与してほしいという印象を述べる者も少なくなかった。また自分の希望する学校に行くことややりたいことをすることを期待しているといった、自律性を尊重するような親の態度を報告した者が19%であった。そのほとんどが親のこの態度を肯定的に捉え、勉強への動機づけがむしろ高まったと報告する者もいた。この他に成績や偏差値の高い学校への進学とは関係のない具体的な希望や関与の言及があった者が11%、勉強や進学以外の期待について言及した者が13%であった。

このように親の高い期待はプレッシャーとして精神的に負担となったり、反発を生み出したりと否定的に受け取られることが少なくないが、逆に期待が低かったり感じられない場合にはより関与を求める傾向が見られた。

親の勉強や進学への関与の仕方については、①自由尊重（例：行きたい学校を決めて自分で頑張きなさいという感じでした；自分の意見を尊重してくれた感じ）、②希望あり（例：高校はできれ

ば公立に行ってほしい；大学には行ってほしかった）、③積極的な関与（例：大学は親の希望、親が決めたところを受けた；すごく心配してテストになると口を出してきた）、④よい大学・進学の希望（例：高校はとりあえず進学校に行きなさい；自分の志望校を偏差値が低いから別の高校にしないとい口出しされた）、⑤低期待・言及なし（例：言われることはなかった；強制されたことは一度もない）の5つのカテゴリーに分類した。

これらのカテゴリーと努力の理由についての回答に基づく4つのカテゴリー（「自分のため」、「自分優先」、「周りの人のため」、「両方」）との関係を検討した。全体的な傾向として、「自由尊重」群は、「自分のため」と「周りの人のため」という相反する努力の理由がそれぞれ多く、自律性を尊重するような親の態度が必ずしも自己志向的な達成動機を促進するのではなく、他者志向的な達成動機も促進することを示唆している。これに対して、勉強への期待が低かったり言及されなかった群では、「自分のため」や「自分優先」の理由が多かった。また親がよい大学・進学の希望を持っている場合、「周りの人のため」という理由を挙げるのが他の群と比較して多かった。

さらに期待経験やプレッシャー経験との関連では、期待された経験のない群や期待はされてもプレッシャーを感じていない群は努力の理由として「自分のため」を、期待に対してプレッシャーを報告した群は「周りの人のため」を、特に大きなプレッシャーを感じていた群は「両方」を挙げる傾向があることが見出された。また葛藤経験との関連では、葛藤経験のない群は努力の理由として「自分のため」を、葛藤経験のある群（全体の26%、その内容はほとんどが受験や勉強、将来の進路に関するもの）は「周りの人のため」や「両方」を挙げるのが相対的に多かった。

このように面接調査の結果は全体として、学業・進学をめぐる親からの高い期待や親との葛藤経験、周りの人から期待されプレッシャーを感じた経験のある人が、「周りの人のため」に努力しているという感じをもちやすいことを示唆している。

本研究では質問紙を用いて、達成課題に対する

自己志向的動機・他者志向的動機の持ち方と親の養育態度と期待された内容との関係を調べる。

方 法

研究参加者 神奈川県内の私立大学生224名。このうち以下の質問紙(1)の調査に参加した者が203名、(2)と(3)の調査に参加した者が185名であり、2回の調査共に参加した者が164名(男性84名;女性80名)であった。

質問紙 (1)伊藤(2004)の「自己・他者志向的動機への態度尺度」の項目を元に作成した72項目(以後、自己・他者志向的動機尺度)について、自分自身の動機づけのあり方を「とてもあてはまる」～「全くあてはまらない」の6件法で回答させた(Range: 1～6)。

(2)Parental bonding instrument(PBI)日本語版(小川, 1994)を高校までの父親, 母親それぞれについて25項目を4件法で回答させた(Range: 0～3)。

(3)親から感じる期待尺度(河村, 2003; 23項目)に伊藤(2009)の面接調査で大学生が指摘した親の期待の内容を踏まえて作成した項目を加えた51項目を4件法で回答させた(Range: 1～4)。

手続き 心理学の授業時間の一部を用いて集団状況で実施した。質問紙(1)は2009年7月、(2)と(3)は2010年1月に実施した。

結 果

下位尺度の構成

PBIは父親, 母親それぞれ受容性(養護)因子

と自律性(過保護)因子に含まれる項目の平均値を尺度得点とした。なお父親, 母親それぞれのPBIについて因子数を2として最尤法プロマックス回転による因子分析を行うと, 父親に対する項目では「私が好んでしたいと思うことをさせてくれた」, 「父(母)がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた」の2項目, 母親に対する項目ではさらに「私が好むような服装をさせてくれた」を加えた3項目が, 本来自律性因子に含まれると仮定されているにもかかわらず受容性因子の因子負荷量の方が高くなっていた。しかし因子負荷量の正負の符号は仮定されているとおりであったため, 先行研究との関係づけを可能にするために, 従来どおりの得点化を採用することとした。自己・他者志向的動機尺度と親の期待尺度は, 最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。

自己・他者志向的動機尺度に対しても最尤法プロマックス回転による因子分析を行い, 固有値の減衰状況と因子の解釈のよさにより, 伊藤(2004)の結果も参考にして5因子解を採用した。最も因子負荷量の高い因子に対してのみ因子負荷量の高い6～7項目により下位尺度を構成した(表1)。第1因子から順番に「自己・他者志向的動機の統合」($\alpha = .87$), 「自己志向的動機の優先」($\alpha = .81$), 「他者志向的動機の自己志向的動機への還元」($\alpha = .82$), 「他者志向的動機の否定的側面の認知」($\alpha = .77$), 「他者志向的動機の優先」($\alpha = .76$)と命名した。下位尺度に含まれる項目の平均値を研究参加者ごとに算出し, 下位尺度得点とした。

表1 自己・他者志向的動機尺度の因子分析

番号	項 目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	M	S D
30	周りの人のために頑張ったとしても、その人が喜んでくれることが、結局は自分の満足感につながるものである。(*)	0.74	0.07	-0.06	0.20	-0.01	4.90	1.04
34	「周りの人のため」は「周りの人が喜ぶと自分も嬉しいから頑張る」ということである。(*)	0.69	0.00	-0.05	-0.02	0.13	4.54	1.12
8	応援してくれているのに応えようという気持ちは、自分の行動に自信や勇気を与えてくれるものである。(*)	0.69	0.03	-0.18	-0.18	-0.02	5.11	1.09
69	周りの人のために頑張ることは、自分の深い次元での喜びが生まれるということだと思う。(*)	0.68	0.19	0.07	-0.13	0.18	4.31	1.10
71	周りの人のために頑張っても、いい結果が残ればそれは自分のものになるし、自分のためにがんばることでそれが人のためになることもある。(*)	0.67	0.12	0.07	0.02	0.03	5.08	0.86

70	応援してくれる人のために頑張るという感情は、その人の喜ぶ顔・しぐさが見たいからという思いと、ほぼ重なるものである。 (*)	0.67	0.00	0.15	-0.14	-0.03	4.63	1.24
68	周りの人が喜ぶことで自分の存在意義を感じることがある。(*)	0.65	0.10	0.24	-0.01	0.15	4.66	1.20
26	「周りの人のために頑張る」と思うのは、実際頑張ろうとすることにより、自分が前向きになり結局の所「自分のため」になっているからだと思う。	0.61	0.13	0.10	0.05	-0.05	4.35	1.10
27	「周りの人のために頑張ろう」と思いながらも、実際にはそれが自分のためになっていることが多いと思う。	0.58	0.01	0.04	0.17	0.01	4.69	1.02
22	自分が頑張り、自分が快や満足、喜びを得るということが結果的に相手にとっても喜び、励みになっている。	0.56	0.24	-0.27	-0.18	0.00	4.13	1.15
55	「周りの人のために頑張る」と「自分のために頑張る」というのは、両方もった方がいいと思う。	0.49	-0.12	-0.07	0.00	0.05	5.01	1.11
29	「周りの人のために頑張る」というのは、結局自己実現に向かって頑張っているのだと思う。	0.47	0.18	0.10	0.19	0.00	4.12	1.07
51	自分が幸せになるということは、自分が一番大切にしている家族、友人、恋人などが幸せになることである。	0.47	0.17	-0.11	-0.08	0.23	4.55	1.19
53	モチベーションが下がるときに、「あの人も頑張っているから頑張ろう」と思うようにしている。	0.46	-0.08	0.06	-0.27	0.18	4.54	1.37
15	「自分のため」に頑張ることも、「周りの人のため」に頑張ることも、同等に大切なことである。	0.46	-0.18	-0.01	-0.05	-0.02	5.09	1.07
9	私にとっての満足とは、自分でよくやったと思うよりも周りの人に認められた時に強く感じるものであるように思う。	0.45	-0.33	0.08	0.08	-0.03	4.65	1.27
58	よい成績をとったり、志望の学校に進むことが、自分のためだけでなく、育ててくれた親や教えてくれた先生などの応援してくれた人のためにもなる。	0.42	0.19	-0.10	0.09	0.01	4.63	1.25
31	周りの人の期待に応えるために頑張るということは、その人の期待に応えられる自分という理想像を実現することが本当の目標としてあるのだと思う。	0.42	0.10	0.22	0.09	0.02	4.07	1.20
16	自分の力だけで自分を奮起させて頑張ることができない場合には、頑張る理由を周りの人に転嫁することで、目標達成のためのプレッシャーとして利用する場合がある。	0.41	-0.08	0.14	-0.02	0.10	4.08	1.30
54	「自分のため」と考えると動機は弱まりやすいが、そのようなときに「周りの人のため」に頑張るのであれば、目標は簡単に変えられないので、動機を補完することができる。	0.38	-0.34	-0.02	0.03	0.38	3.96	1.22
32	他人に奉仕しているという意識自体から自分の喜びや達成感を得られる。	0.36	-0.34	0.19	-0.06	0.11	3.81	1.41
5	「自分のため」にやっても、結局は人がそれを評価してくれるからやれるんだと思う。	0.35	-0.21	0.09	0.26	-0.07	4.53	1.25
36	親や周りの人の期待のために勉強することはいずれ自分にプラスになるのだと考えるようにしている。	0.34	-0.14	0.14	-0.15	0.04	4.15	1.32
56	個人的には何のために努力するかはその時々動機づけによって使い分けしている。	0.34	0.10	0.10	0.04	0.22	4.62	1.15
17	周りの人に見られて、「誰々もがんばっているから・・・」と思ってもらえるように頑張ろうと思う。	0.30	-0.22	0.06	0.12	0.00	3.86	1.37
62	「親を喜ばせるために勉強する」というのはつまり、親が喜んでいて状態の明るい親子関係に自分を置くことを目標としていると言える。	0.29	-0.05	0.26	0.09	-0.15	3.50	1.34
20	何かの目標を達成するために、適宜使い分けていくことが適切ではないかと思う。	0.24	-0.10	0.12	0.11	0.06	4.55	1.28
61	「周りの人のため」にやったことは必ず、その人に感謝の念を抱かせるハズで、その気持ちは将来自分にはね返ってくると思う。	0.21	0.01	-0.05	0.02	0.13	3.46	1.37
37	勉強で「自分のために」という意識を持ったことは無い。	-0.28	-0.07	-0.01	0.17	0.20	1.94	1.08
40	「周りの人のために」でいう「周り」はあくまで支えであり、目的とはなりえないと思う。(*)	-0.07	0.67	0.17	0.06	0.04	3.72	1.24
38	自分のために頑張るというやり方でなければ自分を上昇させられない。(*)	0.05	0.63	0.07	-0.08	-0.14	3.74	1.39
39	「周りの人のために頑張る」というのは、恩着せがましいと思うし、はじめから言いわけや逃げ道をつくっている様な気がする。(*)	-0.26	0.63	0.24	0.07	0.19	3.37	1.42
59	「周りの人」というのは始めから目的とするものではなく、結果に付随してくるものだと思う。(*)	0.18	0.63	-0.10	0.09	-0.13	3.80	1.21
25	基本的にすべての出来事は「自分のために頑張る」のであり、その上でその行為を自分が行うことで周囲の人間の利益になったり、その人を楽しませたり、幸せにするのだと思う。(*)	0.20	0.59	-0.04	0.09	-0.10	4.29	1.22
24	まず自分の為に頑張る、そして周りの人の為に頑張るようにしている。(*)	0.30	0.59	-0.18	0.02	-0.10	4.18	1.27

21	周りの人に気持ちを向けるにはまず自分が満足して充実していなければいけないと考える。(*)	0.29	0.57	-0.17	-0.01	-0.01	4.69	1.08
60	「周りの人のために頑張る」ということはあくまで間接的な目標であるのだと思う。	0.17	0.53	0.10	0.16	-0.10	4.04	1.17
12	結局は「自分のために」という風に考えられないと高いモチベーションをもって取り組むことは難しい。	0.00	0.53	0.04	0.08	0.00	3.86	1.19
2	「自分のために」を第一にした方がいいと思う。	0.05	0.53	0.19	-0.06	-0.10	4.17	1.28
57	「自分のために頑張る」という場合のような自分というものを確立してその重みというものを自分でつかめればこそ、周りの人のために奉仕したり感謝したりすることができるのだと思う。	0.36	0.52	-0.04	0.01	0.01	4.32	1.05
23	最初から周りの人のために頑張ってしまうと、自分の満足が他人の態度や反応に依存してしまうことになるので良い結果にはつながらないと思う。	-0.05	0.51	0.00	0.15	0.26	3.75	1.25
47	「周りの人のために」というのは、自分の行為に対する責任転嫁であると感じる。	-0.12	0.41	0.32	0.05	0.21	3.21	1.19
72	勉強で「周りの人のために」という意識を持ったことは無い。	-0.13	0.39	0.04	-0.10	0.02	3.69	1.67
1	「周りの人のために」に頑張ったというのは結果としてそうだったか、ただの建て前に過ぎないと思う。	-0.24	0.38	0.23	0.07	-0.06	3.43	1.32
3	他人をけ落としているわけだから、自分のためにがんばらないといけないと思う。	-0.03	0.38	0.05	-0.02	-0.03	3.87	1.47
7	周りの人を意識せず、全て「自分のために」頑張るのは実に困難なことである。	0.12	-0.19	0.09	0.12	0.07	4.50	1.38
35	しばしば「自分は親や周りの期待のために勉強している」と感じることがある。	0.00	-0.26	0.05	0.18	0.13	3.15	1.47
6	「周りの人のために」に頑張ることが多い	0.23	-0.38	-0.02	-0.05	0.21	3.77	1.16
10	「自分のために頑張る」と言っても、その途中に周りの人からの応援とその期待に応える気持ちがないと頑張りは持続しないと思う。	0.38	-0.42	-0.03	0.16	-0.02	4.42	1.29
63	「周りの人のために頑張る」ということは、「人からよく思われたい」「人の期待を裏切って悪く思われたくない」という思いにつながっている。(*)	0.15	-0.08	0.77	0.11	-0.18	4.37	1.22
66	「周りの人のために頑張る」とはいてもそれは自己満足のためのように感じる。(*)	0.07	0.20	0.71	-0.24	-0.07	4.09	1.21
64	周りの人のために頑張るのは結局は自分を人に肯定してもらいたいということであって自分のためでもあると思う。(*)	0.35	-0.15	0.63	0.20	-0.24	4.43	1.19
33	「誰かのために頑張る」だとか「みんなのために頑張る」という言い方は、周りの人にとって自分が意味ある存在であるということを主張したいもしくは確認したいという気持ちがあるように思える。(*)	0.01	-0.05	0.60	0.05	0.03	4.10	1.27
67	「両親や先生のために頑張る」というのは、彼らを喜ばせている自分が好ましいと考えているにすぎない。(*)	0.07	0.21	0.58	-0.05	0.05	3.81	1.27
48	「周りの人のために」に頑張るというのは、結局、周りの人のためにやっただけだからいいというような言いわけや逃げ道をつくってしまう可能性がある。(*)	-0.16	0.38	0.49	0.07	0.05	3.38	1.26
65	「親のため、家族のため」とある困難を乗り切ろうとする人がいるが、それも究極的には、自分のためである。(*)	0.21	0.03	0.44	0.09	-0.12	4.16	1.25
13	「周りの人のために頑張る」という考え方は、結果がでないと「申し訳ない」と思ってしまう負担である。(*)	-0.03	-0.01	-0.11	0.77	0.03	4.06	1.17
14	「周りの人のために頑張る」というのは、「失敗できない」という過度のプレッシャーを生むことになる。(*)	0.01	0.13	-0.07	0.69	0.11	3.88	1.19
11	「周りの人のために頑張る」と思いながらやると、義務感と見返りを期待する気持ちがうまれる。(*)	0.04	0.06	0.11	0.54	0.08	4.06	1.17
19	「周りの人のために頑張る」ということは「自分のために頑張る」という考えに比べてハイリスク・ハイリターンだと思う。(*)	0.01	-0.04	-0.06	0.47	0.15	3.43	1.41
50	「周りの人のために」に頑張るというのは、周りの人の期待がなくなった時、やる気がうせてしまうのではないかと思う。(*)	0.06	0.04	0.05	0.44	-0.03	4.20	1.29
28	「周りの人のために頑張る」と言っても、周りの人に失望されないようにとか嫌われないように頑張るということだと思う。(*)	-0.13	-0.12	0.28	0.44	0.03	3.52	1.42
49	「周りの人のために」だけだと結果が目に見える形で出ないと、目標達成できないため、気負いを生んでしまう可能性がある。(*)	-0.09	0.23	0.11	0.43	0.20	3.71	1.15
41	「自分のために」と考える方が、「周りの人のために」と考えるより、自分に対して感じる責任感が軽くなる。	-0.02	0.20	0.01	0.31	0.22	3.50	1.30

44	「周りの人のために頑張っている」と思うことによって、「自分のためにがんばっている」と思うよりも甘えがなくなると思う。 (*)	0.11	-0.22	-0.08	0.15	0.51	3.43	1.29
42	「自分のため」と考えると、基準を低くしてしまい、「自分のために頑張ったから」ということを言い訳にしまうかもしれない。 (*)	0.08	0.00	-0.01	0.30	0.47	3.56	1.40
52	モチベーションが下がったときに、「周りの人のため」というのを支えることができる。 (*)	0.39	-0.20	0.05	-0.19	0.47	3.96	1.35
45	「周りの人のために」という方が頑張りやすい。 (*)	0.14	-0.40	-0.07	0.04	0.46	3.55	1.34
43	もし全く自分の満足感のためにひたすら一つのことを打ち込んでいる人がいたら、それはとても孤独なことだと思う。 (*)	0.06	0.07	-0.12	0.06	0.42	2.71	1.56
46	最終的な結果から考えると「周りの人のため」の方が高い成果を得られると思う。 (*)	0.25	-0.32	-0.03	0.15	0.41	3.59	1.30
4	「自分のため」だけに頑張ることは精神的にきついと思う。	0.09	-0.10	-0.15	0.12	0.34	3.88	1.46
18	スランプに陥ったときに、「周りの人のために」といった動機づけで補完することがある。	0.15	-0.27	0.23	-0.01	0.34	3.11	1.27
因子間相関		因子1	-0.15	0.10	0.06	0.22		
		因子2		0.15	0.15	-0.21		
		因子3			0.45	0.14		
		因子4				0.02		

注) (*) は下位尺度として使用した項目を示す。

親の期待の尺度に対しても最尤法プロマックス回転による因子分析を行い、5因子解を採用して、同様の手続きで下位尺度項目を選択した。その上で項目の内容を考慮して、因子負荷量の高い4～7項目により下位尺度を構成した(表2)。第1因子から順番に「良い学校・良い就職」($\alpha = .88$)、「社会的受容と自己実現」($\alpha = .82$)、「親孝行・見栄」($\alpha = .70$)、「勉強・同居」($\alpha = .62$)、「人並み・普通」($\alpha = .64$)と命名した。また特に第2因子の「社会的受容と自己実現」は社会で他

者とうまくやっていくこと(社会的受容)と自分のやりたいことをやること(自己実現)の2つの期待が含まれていたもので、さらに「社会的受容」($\alpha = .75$)と「自己実現」($\alpha = .77$)の2つの下位尺度を構成して分析に加えた。下位尺度に含まれる項目の平均値を研究参加者ごとに算出し、下位尺度得点とした。最後にこれら6つの下位尺度得点を単純に加算した得点を「全体的期待」得点とした。

表2 親の期待尺度の因子分析

番号	項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	M	S D
1	名の知れた大学へ行ってほしい(*)	0.92	-0.03	-0.12	-0.03	-0.12	2.89	0.89
22	大学に行くのは当たり前、少しでもランクの高い大学に行ってほしい(*)	0.84	-0.12	-0.12	0.13	-0.05	2.57	1.01
2	社会的に名前の知られている企業に就職してほしい(*)	0.81	-0.06	-0.02	-0.07	-0.09	2.78	0.90
9	なるべくなら、偏差値の低い大学には行ってほしくない(*)	0.71	-0.07	-0.07	0.04	0.04	2.90	0.86
26	就職先の選択の幅が広がるようにいい大学に行っておくといひ (*)	0.68	0.11	-0.15	0.15	-0.01	2.98	0.85
16	とりあえず大学には行ってほしい	0.54	0.01	-0.03	0.19	-0.05	3.15	0.94
36	給料の高い会社に就職してほしい(*)	0.52	0.00	0.25	0.03	0.08	2.72	0.84
6	もっと勉強をがんばってほしい	0.43	0.03	0.32	-0.07	0.09	3.02	0.85
43	他人に誇れる肩書きであってほしい	0.40	0.12	0.26	0.13	-0.06	2.46	0.85
(33)	成績上位者リストに載ってくれと嬉しい	0.36	0.15	0.23	0.01	0.01	2.86	0.96
30	派遣やフリーターにはなあってほしくない	0.36	0.02	0.17	-0.08	0.12	3.52	0.77
(41)	将来苦労しないように、今しっかり勉強をしたほうがよい	0.35	0.22	0.19	-0.03	0.25	3.29	0.72
(21)	景気の波に左右されるような会社には就職してほしくない	0.30	0.14	0.27	0.03	0.22	2.75	0.84
(51)	試験前は家事の手伝いなどより、まず勉強をしてほしい	0.28	0.11	0.01	0.06	0.08	2.78	0.91
17	他人の気持ちがわかるような人間になってほしい(*1)	0.05	0.75	0.04	0.05	-0.04	3.50	0.62
29	自分に正直に生きてほしい(*2)	-0.05	0.68	-0.22	0.01	0.12	3.20	0.73
10	誰にでも好かれる子どもになってほしい(*1)	0.21	0.66	0.09	-0.08	-0.22	3.26	0.74
39	礼儀正しい人間になってほしい	0.13	0.65	0.14	-0.17	0.01	3.63	0.54

19	社会のなかで受け入れられる子になってほしい (*1)	0.17	0.65	0.08	-0.05	0.10	3.41	0.66
46	人を差別したり悪口を言ったりするような人間にはなってほしくない	-0.05	0.60	0.14	-0.14	-0.02	3.38	0.78
44	夢をもって、その夢に向かってがんばってほしい (*2)	-0.16	0.59	-0.11	0.09	0.05	3.30	0.74
18	自分 (子ども) のやりたいことを仕事としてやっていてほしい (*2)	-0.13	0.59	-0.31	0.09	0.12	3.26	0.82
47	人の役に立つような職種についてほしい (*1)	-0.01	0.51	0.16	0.07	0.00	2.72	0.83
8	とにかく健康でいてくれればいい	0.02	0.46	-0.22	0.11	0.16	3.46	0.73
(14)	自分 (子ども) の希望する学校に進学してほしい	-0.11	0.37	-0.11	0.25	0.04	3.16	0.89
(27)	学校やクラスの代表になってほしい	0.03	0.28	0.30	0.20	-0.18	1.91	0.71
50	就職したら仕送りをして家計を助けてほしい (*)	-0.05	0.01	0.60	-0.01	-0.05	2.40	0.94
3	社会に出たら家族の世話をしてほしい (*)	-0.04	-0.17	0.56	0.06	-0.08	2.39	0.91
15	親孝行をしてほしい (*)	-0.16	-0.02	0.56	0.17	0.03	2.79	0.82
40	近所の人に子どもの出来を褒められると嬉しい (*)	-0.12	0.28	0.53	-0.01	-0.09	3.08	0.86
35	よその子どもと比較して自分の子どものほうが優れていてほしい (*)	0.24	-0.03	0.51	0.08	-0.05	2.35	0.90
34	国家資格取得と結びつくような学部を選んでほしい	0.07	-0.03	0.50	0.17	0.03	2.09	0.82
11	公務員などの安定した職業についてほしい	0.14	-0.07	0.45	-0.08	0.18	2.65	1.00
(20)	子どもはくちごたえしないで素直に言うことを聞くものだ	0.09	-0.23	0.34	0.24	0.11	2.16	0.94
(45)	就職に有利になるような資格や語学を習得してほしい	0.20	0.10	0.33	0.06	0.26	3.02	0.82
(49)	業績の悪いような会社には就職してほしくない	0.28	0.20	0.31	0.05	0.14	3.03	0.78
(32)	お金がかかるので浪人はしないでほしい	0.07	-0.17	0.25	-0.05	0.18	2.97	1.01
38	成績を上げるために塾や予備校に通ってほしい	0.31	-0.01	-0.12	0.56	0.09	2.17	0.88
13	夜食など作ってやれば、がんばって勉強してくれるはずだ (*)	0.06	-0.04	0.10	0.46	-0.05	1.65	0.72
28	子どもが夜遅くまで勉強しているのに合わせて起きていることで、励みになってほしい (*)	0.04	0.24	0.08	0.40	-0.26	1.64	0.78
42	塾や家庭教師にお金をかけているのだから成績は上がるはずだ (*)	0.14	-0.13	0.23	0.39	0.22	2.13	0.89
48	親元から通えるような大学に行ってほしい (*)	0.07	0.00	0.12	0.37	-0.11	2.49	1.10
25	親と同居か実家の近くに住んでほしい (*)	-0.01	0.19	0.10	0.37	-0.11	2.55	1.03
(12)	親の言うとおりしていれば人生に失敗しないはずだ	0.26	-0.15	0.19	0.24	0.01	1.87	0.95
31	人並みの生活ができればいい (*)	-0.25	0.12	0.07	0.05	0.58	3.16	0.65
37	普通に暮らしてほしい (*)	0.21	0.12	-0.01	-0.12	0.52	3.44	0.59
24	自分のことは自分で考えて決めてほしい (*)	-0.21	0.18	-0.09	-0.11	0.48	3.22	0.74
23	周りに迷惑をかけてほしくない (*)	0.14	0.32	0.02	0.08	0.42	3.49	0.62
(4)	一人で生きていけるように経済的に自立してほしい	0.34	0.01	-0.10	-0.26	0.37	3.41	0.72
(5)	とりあえずどこかに就職してほしい	0.18	-0.20	0.11	-0.05	0.33	3.51	0.70
(7)	学費がかからないような国公立の大学に行ってほしい	0.09	-0.12	0.27	0.00	0.27	2.41	1.02
因子間相関		因子 1	0.06	0.52	0.28	0.12		
		因子 2		0.10	-0.04	0.22		
		因子 3			0.22	0.01		
		因子 4				0.07		

注 1) (*) は下位尺度として使用した項目を示す。

注 2) (*)1 は「社会的受容」、(*)2 は「自己実現」の下位尺度項目を示す。

注 3) () で囲まれた項目番号の項目は因子分析を繰り返す過程で除かれた項目を示す。

2つの調査に共に参加した164名の各下位尺度の平均および標準偏差と性別ごとの平均および標準偏差を表3に示す。自己・他者志向的動機尺度では「自己・他者志向的動機の統合」の得点が最も高い。親の期待尺度では、「人並み・普通」、「自己実現」、「社会的受容」の得点が高い。またPBIでは、受容性得点は母親の方が高く、自律性得点は父親の方が高い。平均値に性差が認められたのは、自己・他者志向的動機尺

度では「自己志向的動機の優先」において男性の得点が高く ($t(160)=2.47, p<.05$)、「他者志向的動機の否定的側面の認知」において女性の得点が高かった ($t(152)=-1.76, p<.10$)。親の期待の尺度では「勉強・同居」において女性の得点が高かった ($t(159)=-3.14, p<.01$)。PBIでは父親、母親、全体ともに受容性において女性の得点が高かった ($t(160)=-2.18, p<.05; t(159)=-2.09, p<.05; t(157)=-2.58, p<.05$)。

表3 各尺度の平均と標準偏差

尺度	全体		男性		女性		性差
	M	SD	M	SD	M	SD	
統合	4.71	0.85	4.66	0.93	4.77	0.75	
自己志向	4.01	0.83	4.17	0.92	3.85	0.70	*
還元	4.03	0.86	4.04	0.93	4.01	0.78	
他者否定	3.86	0.84	3.75	0.95	3.98	0.69	+
他者志向	3.44	0.92	3.39	1.01	3.49	0.83	
良い学校	2.80	0.71	2.88	0.71	2.72	0.71	
受容実現	3.23	0.52	3.20	0.48	3.27	0.55	
親孝行	2.58	0.59	2.54	0.56	2.63	0.63	
勉強同居	2.09	0.58	1.95	0.50	2.23	0.62	**
人並み	3.31	0.45	3.28	0.46	3.34	0.44	
社会受容	3.21	0.53	3.17	0.48	3.24	0.58	
自己実現	3.27	0.64	3.24	0.64	3.29	0.65	
期待全体	17.25	1.91	17.07	1.78	17.45	2.04	
父受容	1.77	0.62	1.66	0.57	1.87	0.65	*
父自律	2.22	0.42	2.26	0.37	2.18	0.46	
母受容	2.23	0.60	2.14	0.55	2.34	0.64	*
母自律	2.10	0.48	2.11	0.50	2.08	0.46	
受容全体	2.00	0.51	1.90	0.48	2.11	0.53	*
自律全体	2.16	0.40	2.20	0.37	2.13	0.42	

注)**: $p < .01$; *: $p < .05$; +: $p < .10$

表4 PBIと親の期待の相関

	良い学校	受容実現	親孝行	勉強同居	人並み	社会受容	自己実現
父受容	0.01	0.44	-0.04	0.09	0.18	0.37	0.40
父自律	-0.22	0.28	-0.17	-0.39	0.18	0.22	0.30
母受容	0.06	0.55	-0.02	0.11	0.20	0.46	0.51
母自律	-0.21	0.46	-0.24	-0.36	0.30	0.30	0.53

表5 自己・他者志向的動機と親の期待の相関

	良い学校	受容実現	親孝行	勉強同居	人並み	社会受容	自己実現
統合	0.22	0.27	0.17	0.18	0.29	0.30	0.16
自己志向	0.01	-0.09	0.02	-0.06	0.05	-0.04	-0.10
還元	0.17	-0.07	0.00	0.09	0.12	-0.03	-0.10
他者否定	0.16	-0.14	0.04	0.15	0.15	-0.14	-0.11
他者志向	0.05	0.17	0.09	0.16	0.22	0.21	0.08

下位尺度間の相関

2つの調査に共に参加した164名について下位尺度間の相関を検討した。PBIと親の期待尺度の相関では、両親の受容性と「社会的受容」および「自己実現」の間に正の相関が認められた。両親から受容されてきたと認知している者は、「社会から認められること」と「自分のやりたいことをやること」を親の期待として感じている。また両親の自律性と「自己実現」の間に正の相関が認められ

た。両親から自律性を促されていると認知している者は、「自分のやりたいことをやること」を親の期待として感じている。さらに両親の自律性は「勉強・同居」と負の相関、「良い学校・良い就職」とも弱い負の相関が認められた（表4）。父親と母親の相関を比較すると、受容性、自律性ともに「社会的受容」および「自己実現」との相関係数が母親の場合の方が高かった。

自己・他者志向的動機尺度と親の期待尺度の相関では、「自己・他者志向的動機の統合」が「社

表6 自己・他者志向的動機とPBIの相関

	父受容	父自律	母受容	母自律
統合	0.09	0.06	0.25	0.06
自己志向	-0.14	0.14	-0.11	-0.13
還元	-0.04	-0.07	0.00	-0.10
他者否定	-0.09	-0.11	-0.10	-0.15
他者志向	0.09	-0.03	0.16	-0.06

表7 養育態度の分類

		自律	養護	統制	放任	合計
父親	人数	61	32	39	48	180
	%	33.9	17.8	21.7	26.7	
母親	人数	64	38	46	32	180
	%	35.6	21.1	25.6	17.8	

表8 養育態度4群ごとの親の期待の差異

		良い学校		受容実現		親孝行		勉強同居		人並み		社会受容		自己実現		
父親	自律	2.66	b	3.48	a	2.52		1.95	b	3.41	a	3.41	a	3.55	a	
		0.58		0.38		0.53		0.47		0.40		0.44		0.50		
	養護	3.15	a	3.24		2.77		2.36	a	3.41		3.29		3.17	b	
		0.66		0.46		0.61		0.62		0.44		0.49		0.58		
	統制	2.87		2.99	b	2.64		2.28		3.15	b	3.01	b	2.96	b	
		0.71		0.51		0.56		0.54		0.51		0.51		0.62		
	放任	2.63	b	3.16	b	2.57		1.93	b	3.34		3.12	b	3.22	b	
		0.78		0.57		0.69		0.61		0.45		0.62		0.69		
	F値		4.67**		9.05**		1.34		6.53**		2.93*		5.73**		8.48**	
	母親	自律	2.81		3.51	a	2.52		2.02	ad	3.39	a	3.46	a	3.59	ac
0.67				0.41		0.62		0.52		0.45		0.52		0.45		
養護		2.89		3.32	c	2.79	a	2.46	ac	3.43	a	3.34	a	3.31	a	
		0.64		0.43		0.50		0.54		0.43		0.42		0.59		
統制		3.02	a	2.92	bd	2.75	a	2.20	a	3.13	b	3.01	b	2.80	b	
		0.66		0.43		0.53		0.51		0.43		0.47		0.61		
放任		2.47	b	3.08	b	2.38	b	1.63	b	3.38	a	2.98	b	3.22	ad	
		0.75		0.40		0.69		0.45		0.40		0.42		0.48		
F値		4.31**		19.96**		4.25**		16.62**		4.66**		12.11**		19.49**		

注1)ab間、およびcd間では5%水準で差異が認められた。

注2)**:p<.01;*:p<.05

会的受容」,「人並み・普通」と弱い正の相関が認められたのみで、全体として相関は認められていない(表5)。

自己・他者志向的動機尺度とPBIの相関でも、「自己・他者志向的動機の統合」が母親の受容性と弱い正の相関が認められたのみで、やはり全体として相関は認められていない(表6)。

養育態度による分類

従来の養育態度の分類様式に従い、受容性(父親 $M=1.77$; 母親 $M=2.23$)と自律性(父親

$M=2.21$; 母親 $M=2.09$)の得点の平均値(表3)で研究参加者を分割し、その組み合わせで母親、父親それぞれに自律群(高受容・高自律),養護群(高受容・低自律),統制群(低受容・低自律),放任群(低受容・高自律)の4群を構成した(表7)。

親の期待の下位尺度得点について分散分析(表8)を行ったところ、父親の養育態度では「親孝行・見栄」以外で主効果が認められた。自律群は「社会的受容」,「自己実現」,「人並み・普通」を高く、「良い学校・良い就職」,「勉強・同居」といった親の学業に対する期待を低く認知している。養護群は

表9 養育態度4群ごとの自己・他者志向的動機の差異

		統合	自己志向	還元	他者否定	他者志向
父親	自律	4.72	4.03	3.99	3.72	3.45
		0.66	0.78	0.73	0.68	0.74
	養護	4.92	3.85	4.14	3.99	3.56
		0.67	0.89	0.86	0.83	0.87
	統制	4.55	3.89	4.06	3.89	3.47
		0.83	0.74	0.81	0.77	0.95
	放任	4.68	4.20	3.98	3.91	3.34
		1.13	0.92	1.06	1.07	1.16
	F値	0.95	1.28	0.24	0.78	0.33
母親	自律	4.79	3.99	3.94	3.73	3.33
		0.84	0.86	0.92	0.85	0.97
	養護	5.11	a 3.94	4.28	4.12	3.94
		0.53	0.78	0.70	0.81	0.78
	統制	4.46	b 4.20	4.04	3.90	3.18
		0.85	0.86	0.97	0.85	0.90
	放任	4.54	b 3.84	4.02	3.84	3.43
		1.01	0.83	0.62	0.85	0.85
	F値	4.24**	1.20	1.06	1.48	4.58**

注1)ab間では5%水準で差異が認められた。

注2)**:p<.01

逆に「良い学校・良い就職」、「勉強・同居」といった親の学業に対する期待を高く認知している。統制群は「勉強・同居」を高く認知しているが、「社会的受容」や「自己実現」の認知が低く、「人並み・普通」の認知も低い。放任群は自律群と同様に「良い学校・良い就職」、「勉強・同居」といった学業に対する期待を低く認知しているが、「社会的受容」や「自己実現」は自律群と比較して認知していない。

一方、母親の養育態度ではすべての期待の下位尺度で有意であった。自律群は「社会的受容」、「自己実現」、「人並み・普通」を高く認知している点で、父親の養育態度の場合と似ている。養護群は「社会的受容」、「自己実現」、「人並み・普通」に加えて、「親孝行・見栄」と「勉強・同居」という親の個人的な要求に対する期待も高く認知しており、全体として期待の認知が高いと言える。統制群は「良い学校・良い就職」の期待を高く認知しており、「親孝行・見栄」と「勉強・同居」の親の個人的な要求に対する期待を高く認知しているが、「自己実現」、「社会的受容」、「人並み・普通」の認知は低い。放任群は「良い学校・良い就職」、「親孝行・見栄」、「勉強・同居」といった親の個人的な要求に対する期待を低く認知しており、「社会的受容」

の認知も低い。

続いて、自己・他者志向的動機の下位尺度得点について分散分析(表9)を行ったが、父親の養育態度で有意な主効果が得られた変数はなかった。母親の養育態度では、「自己・他者志向的動機の統合」と「他者志向的動機の優先」が有意であり、いずれも養護群が最も高く、統制群が最も低かった。

自己・他者志向的動機を規定する要因

父親と母親それぞれの受容性得点と自律性得点を説明変数、自己・他者志向的動機の下位尺度得点を目的変数とする重回帰分析を行った。説明変数を投入するにあたっては性別をダミー変数(男性=1, 女性=2)として投入した。その結果、「自己・他者志向的動機の統合」は母親の受容性の得点が予測しており、母親が受容的に接していたと認知しているほど他者志向的な動機と自己志向的な動機を接近させて捉えている。また「自己志向的動機の優先」は両親の自律性得点が予測していたが、その影響の方向は逆であり、父親の自律性を支える養育態度は自己志向的動機を促進するが、母親の自律性を支える養育態度はむしろ自己志向的動機を抑制し過保護的な養育態度が自

表10 養育態度を説明変数とする重回帰分析

	統合	自己志向	還元	他者否定	他者志向
性		-.17*		.14+	
父受容					
父自律		.29**			
母受容	.27**				.23*
母自律		-.25*			-.20+
R ²	.06+	.12**	.01	.05	.06+
調整済みR ²	.03+	.09**	-.02	.02	.03+

注)**: p<.01; *: p<.05; +: p<.10

表11 親の期待を説明変数とする重回帰分析

	統合	自己志向	還元	他者否定	他者志向
性別		-.19		.15+	
良い学校	.15+		.17+	.21*	
親孝行					
勉強同居					.16+
人並み	.22**		.18*	.25**	.20*
社会受容	.17+			-.29**	.20+
自己実現					
R ²	.18**	.06	.07	.15**	.10*
調整済みR ²	.14**	.02	.02	.11**	.06*

注)**: p<.01; *: p<.05; +: p<.10

己志向的動機を促進するという結果であった。また「他者志向的動機の優先」は母親の受容性得点と自律性得点が予測しており、母親の態度を受容的と認知するほど、また過保護と認知するほど、他者志向的動機の獲得が促進されるという結果であった(表10)。

同様に親の期待尺度の下位尺度得点を説明変数、自己・他者志向的動機の下位尺度得点を目的変数とする重回帰分析を行った。説明変数を投入するにあたっては性別をダミー変数(男性=1, 女性=2)として投入し、「社会的受容」と「自己実現」は分けて説明変数として投入した。その結果、「自己・他者志向的動機の統合」は、「人並み・普通」、「社会的受容」、「良い学校・良い就職」によって予測されており、学業に対する高い期待がある場合、さらに他者から受容されることの期待や堅実な期待を親から持たれていると認知している場合に他者志向的動機と自己志向的動機を接近させて認知することが示唆された。「他者志向的動機の自己志向的動機への還元」も「人並み・普通」、「良い学校・良い就職」によって予測されていたが、これは上記の結果を反映したものと捉え

ることもできる。プレッシャーなどの「他者志向的動機の否定的側面の認知」もまた「人並み・普通」、「良い学校・良い就職」によって予測されており、このような期待の認知が他者の期待に応えることを圧力と感じやすくさせることが示唆される。一方で、「社会的受容」がこのような否定的認知を抑制する方向に働いていることも明らかにされた。この結果に対応して、「他者志向的動機の優先」は「社会的受容」によって予測されていた。親が対人的な関係に重きをおいて期待している場合に、他者志向的動機が内面化されやすいと考えられる。さらに「勉強・同居」のように親の個人的な要求を満たすことが求められていると認知している場合や「人並み・普通」といった堅実な親の期待が認知される場合にも他者志向的動機を獲得しやすかった(表11)。

補足的分析

これまでの分析の妥当性に関連して以下の2つの可能性について検討を行った。1つ目は親の期待が動機に及ぼす影響が親との関係によって調整されている可能性である。すなわち、親が支持的

表12 全体的期待3群の動機の差異

	統合		他者否定		他者志向	
全体的期待	M	SD	M	SD	M	SD
高得点群	5.03 a	0.65	4.02	0.87	3.57 a	0.95
中得点群	4.83 a	0.67	3.89	0.79	3.63 a	0.85
低得点群	4.28 b	1.02	3.72	0.91	3.07 b	0.91

注1) ab間では5%水準で差異が認められた。

で親との関係が良好な場合には親の期待が高いほど達成動機づけを高めて、他者志向的動機が獲得されやすいのではないだろうか。一方、親との関係が良好ではない場合には、親の期待はむしろ否定的に働き、他者志向的動機よりも自己志向的動機が獲得されやすいのではないだろうか。この可能性を検討するために、性別（ダミー変数）、父母の受容性得点の平均による全体的受容性得点、6つの親の期待の下位尺度得点を加算した全体的期待得点、およびその交互作用項を説明変数とし、各自己・他者志向的動機の下位尺度得点を基準変数とする重回帰分析を実施した。その結果、「全体的受容性」は「他者志向的動機の否定的側面の認知」（ $\beta = -.25, p < .01$ ）、「全体的期待」は「自己・他者志向的動機の統合」（ $\beta = .39, p < .01$ ）、「他者志向的動機の否定的側面の認知」（ $\beta = .15, p < .10$ ）、「他者志向的動機の優先」（ $\beta = .23, p < .01$ ）をそれぞれ予測していた。しかし、いずれの交互作用項においても偏回帰係数は有意ではなく、親との関係が期待の影響を調整しているという結果は確認されなかった。

2つ目は期待の影響が直線的ではない可能性がある。すなわち期待が低すぎる場合には達成動機づけを促進しないが、高すぎる場合にも抑制的に影響するため、中程度の適度な期待の高さが最も動機づけを高めることが予測される。プレッシャーや罪悪感のような他者志向的動機の否定的な認知が高すぎる期待によって引き起こされるならば、期待が高い場合には、他者志向的動機は獲得されにくく、むしろ自己志向的動機の獲得が促進されるかもしれない。この可能性を検討するために、6つの親の期待の下位尺度得点と全体的期待得点それぞれについて研究参加者を3群に分けて高得点群、中得点群、低得点群の3群を構成し、また全体的受容性得点についても同様に3群を構

成した。その上で動機の5つの下位尺度得点に対して、それぞれ3（期待）×3（受容性）の分散分析を繰り返し実施した。

その結果、「全体的期待」の主効果が「自己・他者志向的動機の統合」（ $F(2, 145)=8.63, p < .01$ ）、「他者志向的動機の否定的側面の認知」（ $F(2, 146)=2.87, p < .10$ ）、「他者志向的動機の優先」（ $F(2, 146)=5.15, p < .01$ ）の各変数で有意であった。「全体的受容性」の主効果および交互作用はどの動機変数においても有意とはならなかった。多重比較を行ったところ、特に「自己・他者志向的動機の統合」と「他者志向的動機の優先」では、低得点群が最も低いが、中得点群と高得点群の得点に差異はなく、「他者志向的動機の優先」では数値自体は中得点群の方が高くなっていた（表12）。この結果は期待の影響が直線的ではないことを示唆している。

また全体的期待の代わりに各期待の下位尺度得点を入れた分散分析では、「良い学校・良い就職」の主効果が「自己・他者志向的動機の統合」（ $F(2, 147)=2.72, p < .10$ ）と「他者志向的動機の否定的側面の認知」（ $F(2, 148)=3.12, p < .05$ ）、「人並み・普通」と「社会的受容」の主効果が「自己・他者志向的動機の統合」（ $F(2, 148)=5.01, p < .01$ ）； $F(2, 148)=3.83, p < .05$ ）と「他者志向的動機の優先」（ $F(2, 150)=4.48, p < .05$ ）； $F(2, 150)=3.20, p < .05$ ）、「勉強・同居」の主効果が「他者志向的動機の否定的側面の認知」（ $F(2, 148)=3.54, p < .05$ ）、「自己実現」の主効果が「自己・他者志向的動機の統合」（ $F(2, 147)=5.46, p < .01$ ）で認められた。このなかで「自己実現」の主効果のみが中得点群が低いというU字型を見せた（高得点群： $M=5.06, SD=0.70$ ；中得点群： $M=4.55, SD=0.85$ ；低得点群： $M=4.71, SD=0.96$ ）。

また「良い学校・良い就職」と「全体的受容性」

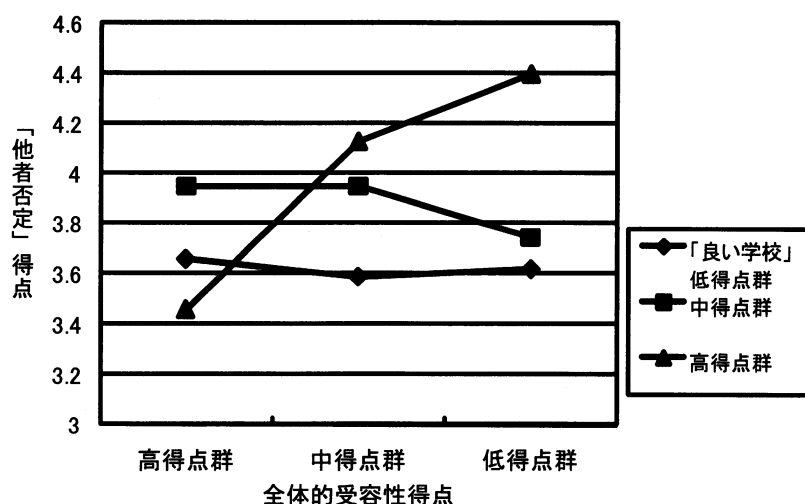


図1 「他者否定」の交互作用

の有意な交互作用が「他者志向的動機の否定的側面の認知」で得られた ($F(4, 149)=2.16, p<.10$)。これは一般に学業遂行に対する高い期待はプレッシャーなど重荷になりやすいが、受容的な関係においてはプレッシャー等を感じさせにくいという結果であり、先の仮説を支持するものである(図1)。また「社会的受容」と「全体的受容性」の交互作用と「自己実現」と「全体的受容」の交互作用が「他者志向的動機の優先」についてそれぞれ得られた ($F(4, 150)=3.07, p<.05$; $F(4, 149)=2.19, p<.10$)。ただし人数が極端に少ないセルが含まれており解釈が困難な結果であった。

考 察

自己・他者志向的動機尺度の因子分析では5つの因子を抽出し、各因子に含まれる項目の内容が従来の因子分析の結果にほぼ対応するものであることが確認された。第1因子の「自己・他者志向的動機の統合」の項目の内容を見ると、「周りの人のために努力することが自分の喜びや自分のためになっている」といった内容の項目の負荷量が高かったが、この他に「両方とも重要である」、「状況に応じて使い分ける」、「周りの人の評価が重要

である」といった内容の項目も含まれていた。これらの内容はこれまでの研究では別の因子を構成することもあった。

自己志向的動機と他者志向的動機の間を考慮する場合、両者を対置させてとらえると「自分のため」の努力を重視するか、「周りの人のため」の努力を重視するかの二者択一となる。一方、両者を関連づけることも可能である。その1つが「周りの人のため」の努力を最終的に「自分のため」の努力であるととらえて、他者志向的動機を自己志向的動機に「還元」して、純粋な他者志向的動機を想定しないという考え方である。また「自分のため」の努力と「周りの人のため」の努力を区別した上で、両者を接近していると考ええる見方もある。伊藤(2009b)は、大学生に対する面接調査に基づいて、「自分のため」に努力することが結果的に「周りの人のため」になるという状態と「周りの人のため」に努力することが結果的に「自分のため」になるという状態がそれぞれ言及されうること、また両者がかかなり接近するならば「区別できない」と認知されること、を指摘している。これらの考え方はある程度似ているために、今回の因子分析では1つの因子にまとまると考えられる。

親の期待については6つの下位尺度を使用した。因子分析では5因子を採用したが、第2因子には「他人の気持ちがわかるような人間になってほしい」といった対人関係や社会的関係の良好さへの期待と「自分に正直に生きてほしい」といった自己実現を望む期待の両方が含まれており、本研究の目的からも両者を区別した方がよいと判断したためである。この2つの期待はいずれも人間的な成長を望むものと考えることができる。「自己」と「他者」という観点から、対人関係への志向と自己実現への志向を区別したり両者の統合過程を問題にする理論化はこれまでも認められている(伊藤, 2009c)。今回の結果は2つの異なる志向性への期待を親が子どもに対して同時に抱いていることを示唆しているが、後述するように動機づけへの影響の仕方は異なっていることも明らかにされた。

親の期待についての性差では、「勉強してほしい」とか「同居してほしい」といった親の子どもに対する要求の認知は女性の方が高かった。これは娘に対してできるだけ親元にいてほしいという親の希望が反映された結果と考えられる。進学、社会的受容、自己実現など他の期待については性差は認められなかった。今回の研究参加者は特定の大学に進学した学生に限定されていたという点で、性差が薄められた可能性もある。

養育態度についても性差が認められ、父母の受容性がともに女性の方が高く、親と娘との心理的結びつきの強さが反映されていた。一方、自律性においては男性の方が高いという結果は認められなかった。

従来の養育態度の4分類に従って親の期待を検討すると、自律群は社会的受容や自己実現といった人間的な成長や生活における堅実な期待を認知していた。養護群はこれらの期待に加えて、勉強、学歴、親孝行の期待も高く、様々な内容の期待を全般的に高く認知していた。親からの受容性の高い2群でも、自律性のあり方によって期待の認知に差異があることが明らかにされた。

さらに統制群は、勉強、学歴、親孝行のような期待は高く認知されているが、人間的な成長への期待の認知は低い。大学進学や就職のようなパ

フォーマンス、あるいは親の要求を満たすこと自体を期待されており、過程重視ではなく結果重視の期待を認知していると解釈できる。また放任群は「人並み」以外の期待の値が低く、同じく自律性を尊重されている自律群と比較しても期待のあり方が大きく異なっていることも明らかにされた。父母の差異を見ると、全体的に母親の養育態度の方が父親より期待認知への影響が大きいことも示唆されている。

このように親の養育態度と子どもに対する期待は密接に関連していると考えられることができる。ただし、今回の調査はいずれも子どもの視点から見た回想的な報告によるため、解釈には慎重を期す必要がある。

本研究の主たる目的は、他者志向的動機の規定因としての親の養育態度と親からの期待の影響を検討することであった。先行研究より、他者志向的動機の獲得には親から期待された経験が必要であり、特に親との関係が良好である場合にその傾向が強まることが予想された。また親との関係が良好でない場合や親からの期待が大きすぎる場合には、期待に伴うプレッシャーのような他者志向的動機の否定的な側面を認知しやすいことも予想された。さらに親との関係が良好な場合にはたとえ自律性を促進するような親の態度の下でも他者志向的動機が獲得されうることも予想された。

分析の結果、他者志向的動機を重視する傾向、あるいは他者志向的動機と自己志向的動機を統合する傾向は、母親の受容性が高いほど、そして生活における堅実な期待(「人並み・普通」)や社会的受容に対する親の期待を認知しているほど、強くなることが示された。これらの傾向は期待全般の高さとも関連しており、期待経験が他者志向的動機の獲得を促すとする予想に合致する結果が得られた。また母親の過保護が他者志向的動機の重視に正の影響を与えており、青年期における母親の関係の重要性が反映されている。

自己志向的動機を重視する傾向は父親の自律性に伴って強くなっていたが、母親の過保護もまた正の影響を与えていた。つまり過保護な母親を持つ大学生は自己志向的動機も他者志向的動機も重視するという一見矛盾する結果が得られたことに

なる。これは、母親が「養護型」の場合、他者志向的動機が優先されるが、「統制型」の場合、自己志向的動機が優先されるという結果と対応していると考えられるが、さらに今後の検討が必要であろう。

プレッシャー等の他者志向的動機の否定的な認知については、高い学歴のような期待を持たれる場合に高くなることが確認され、予想が裏付けられた。また他者から受容といった対人的な期待を持たれると、他者志向的動機を否定的に認知しにくいことも示されていた。一方、「人並み・普通」といった堅実な期待を持たれる場合には、他者志向的動機に対して否定的に認知しやすかった。全体的には、期待の高さに応じてプレッシャーを感じることはある程度避けられないと解釈できるかもしれない。堅実な期待は他者志向的動機の重視にも正の影響を与えており、このような親の期待は子どもが親の期待に応えようとすることに対して葛藤を生じさせている可能性が示唆される。堅実な期待は他者志向的動機を自分のためと見なす還元的な考え方も促進しており、この「人並み・普通」という期待のもつ意味についてさらに検討していく必要がある。

親からの期待が他者志向的動機の獲得やその否定的認知に及ぼす影響を、親との受容性が調整しているという予測については、積極的に支持するような結果がほとんど得られなかった。ただし学歴に対する高い期待が期待に応えることに対する心理的負担に及ぼす影響については、親の受容的養育態度が調整していた。親の受容性が低い場合には高い期待によってプレッシャーなどの否定的認知を生じやすいが、親が受容的な場合には否定的な認知が生じにくいという結果であり、予測を支持する結果と考えられる。

引用文献

- 伊藤忠弘 (2004). 達成行動における「他者志向的動機」の役割 帝京大学心理学紀要, **8**, 63-89.
- 伊藤忠弘 (2009a). 大学生の親子関係の認知と親からの期待・プレッシャー経験 ―他者志向的動機づけを規定する要因の予備的検討― 青山心理学研究, **9**, 11-22.
- 伊藤忠弘 (2009b). 重要な他者からの期待や葛藤経験と努力の理由づけ 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集, 62-65.
- 伊藤忠弘 (2009c). 達成動機づけにおける「個人」と「社会」の調整と統合 ―アスリートのボランティア事例に基づいて― 学習院大学文学部研究年報, **56**, 181-205.
- 河村照美 (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究, **4**, 101-110.
- 真島真里 (1995). 学習動機づけと「自己概念」 東洋 (編) 現代のエスプリ 333 意欲 やる気と生きがい 至文堂 pp. 123-137.
- 小川雅美 (1994). 不安神経症患者と両親の養育態度の関連 東京女子医科大学雑誌, **64**, 418-423.